慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	うつ病に対する反芻焦点化認知行動療法：有効性の検討とうつ病遷延化の解明
Sub Title	Rumination-focused cognitive-behavioral therapy for depression : investigation of residual symptoms of depression and examining its effectiveness
Author	中川, 敦夫(Nakagawa, Atsuo) 大野, 裕(Ōno, Yutaka) Watkins, Edward(Abe, Takayuki) 阿部, 貴行(Kikuchi, Kayoko) 菊地, 佳代子(Mitsuda, Dai) 満田, 大(Katō, Noriko) 加藤, 典子(Umegaki, Yūsuke) 梅垣, 佑介(Kurata, Chika) 倉田, 知佳(Takechi, Sayuri) 武智, 小百合(Nakagawa, Yūko) 中川, ゆう子(Kudō, Yuka) 工藤, 由佳(Katayama, Nariko) 片山, 奈理子(Nakao, Shigetsugu) 中尾, 重嗣(Kobayashi, Yuki) 小林, 由季(Ishikawa, Natsumi) 石川, 菜津美(Hyō, Erika) 馮, えりか(Odagiri, Sayaka) 小田桐, 沙耶歌
Publisher	
Publication year	2020
Jtitle	科学研究費補助金研究成果報告書 (2019.)
JaLC DOI	
Abstract	わが国での実施に適した新規認知行動療法プログラムである反芻焦点化認知行動療法 (rumination-focused CBT: RFCBT) の実践を目的に、本研究ではRFCBT治療者用ハンドブックを作成し、パイロットケース (5例) としてRFCBTを行い、そのfeasibilityを確認した。さらに、原著者のEdward Watkins教授らのもと、面接音声ファイルを用いたスーパービジョンを受け、この経験を踏まえRFCBT治療者用ハンドブックの改良を図った。そして、うつ病に対するRFBCTの前後比較研究プロトコール (UMIN000037191) を作成し、実施した。 This project aimed to develop a rumination-focused CBT (RFBT) program, a novel cognitive-behavioral therapy, that would be suitable for implementing in a Japanese clinical setting. First, we developed a handbook for RFCBT therapists. Next, we conducted 5 pilot cases of RFCBT and confirmed its feasibility. Further, we performed one case of RFCBT under supervision from the original author Professor Edward Watkins using interview audio files, and based on this experience, we improved the handbook for RFCBT therapists. Then, a pre-post comparative study protocol was (UMIN000037191) of RFBCT for depression that was prepared and implemented.
Notes	研究種目：基盤研究 (C) (一般) 研究期間：2017～2019 課題番号：17K04452 研究分野：認知行動療法・ うつ病・ 臨床研究方法論
Genre	Research Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KAKEN_17K04452seika

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ５ 月 ３０ 日現在

機関番号：３２６１２
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2019
課題番号：１７Ｋ０４４５２

研究課題名（和文）うつ病に対する反芻焦点化認知行動療法：有効性の検討とうつ病遷延化の解明

研究課題名（英文）Rumination-focused Cognitive-Behavioral Therapy for Depression: investigation of residual symptoms of depression and examining its effectiveness

研究代表者
中川　敦夫（Nakagawa, Atsuo）

慶應義塾大学・医学部（信濃町）・特任准教授

研究者番号：３０３３８１４９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,300,000円

研究成果の概要（和文）：わが国での実施に適した新規認知行動療法プログラムである反芻焦点化認知行動療法(rumination-focused CBT: RFCBT)の実践を目的に、本研究ではRFCBT治療者用ハンドブックを作成し、パイロットケース（5例）としてRFCBTを行い、そのfeasibilityを確認した。さらに、原著者のEdward Watkins教授らのもと、面接音声ファイルを用いたスーパービジョンを受け、この経験を踏まえRFCBT治療者用ハンドブックの改良を図った。そして、うつ病に対するRFBCTの前後比較研究プロトコール(UMIN000037191)を作成し、実施した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
うつ病遷延化要因の一つである思考反芻を断ち切ることに焦点をおいた反芻焦点化認知行動療法(rumination-focused CBT , RFCBT)が英国のEdward Watkins教授により開発された。
本研究は、わが国に適したRFCBTの実施法の確立と有効性の検討を目的に、RFCBT治療者用ハンドブックを開発し、研修指導法を確立した。また、研修指導で抽出された課題をRFCBT治療者用ハンドブックに反映させ、改良を図った。そして、5例のうつ病患者にRFCBTを実践し、その実施可能性を確認した。また、RFBCT前後比較研究プロトコール(UMIN000037191)を作成し、実施した。

研究成果の概要（英文）：This project aimed to develop a rumination-focused CBT (RFBT) program, a novel cognitive-behavioral therapy, that would be suitable for implementing in a Japanese clinical setting. First, we developed a handbook for RFCBT therapists. Next, we conducted 5 pilot cases of RFCBT and confirmed its feasibility. Further, we performed one case of RFCBT under supervision from the original author Professor Edward Watkins using interview audio files, and based on this experience, we improved the handbook for RFCBT therapists. Then, a pre-post comparative study protocol was (UMIN000037191) of RFBCT for depression that was prepared and implemented.

研究分野：認知行動療法・うつ病・臨床研究方法論

キーワード：認知行動療法　うつ病　反芻　反芻焦点化認知行動療法　機能分析

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

１．研究開始当初の背景

WHO によれば、うつ病の健康損失を考慮した疾病負荷は、全疾患の中の第 11 番目の大きさを占める(Murray et al., 2012)。うつ病は成人における休業の主要な要因となることからその社会的損失は甚大で、わが国においてそれは年間 3 兆円に上ると見積もられている(Sado et al., 2011)。さらにうつ病は、わが国の国民の約 16 人に 1 人が生涯に一度発症すると推定される発症頻度の高い疾患でもあることからも(Demyttenaere et al., 2004)、有効な治療法・再発予防の確立が望まれている。

うつ病に対する認知行動療法は、薬物療法と同等の治療効果を有することから(Amick et al., 2015)、国内外の主要なうつ病治療ガイドラインにおいて治療選択の 1 つとして認知行動療法は推奨されている。しかし、うつ病患者に対して Beck らの開発した従来型認知行動療法を施行しても、寛解に至る者は 40%程度に留まっているのが現状である (Dimidjian et al., 2006; Nakagawa et al.,2017)。

近年、反芻(rumination)と心配を主とする反復的な否定的思考は、抑うつと不安を引き起こす共通要因であるだけでなく、うつ病遷延化の維持要因として注目され、うつ病患者の心理学的介入の中核の１つとして研究されてきた(Nolen-Hoeksema et al., 2008; Topper et al., 2010)。従来の Beck 認知行動療法が思考内容や行動の変容を介入の焦点としているのに対して、うつ病遷延化の維持要因をいかに断ち切るかに注目し、思考の仕方（プロセス）に介入の焦点をおいた新規認知行動療法プログラムの反芻焦点化認知行動療法 (rumination-focused CBT [RFCBT])が、英国 Exeter 大学の Watkins 教授らにより開発された (Watkins et al., 2011)。

わが国においては、反芻と抑うつの関連の検討など心理学的基礎研究が中心に行われているたが、臨床患者を対象とした RFCBT の実証研究は行われていなかった。

２．研究の目的

わが国での臨床実施に適した新規認知行動療法プログラムである、反芻焦点化認知行動療法 (rumination-focused CBT [RFCBT])の実践を目的に、RFCBT の臨床実施に必要となるツールを開発し、スーパービジョン法を確立する。また、RFCBT のパイロットケースを行い、feasibility（実施可能性）を確認する。そして、RFCBT の有効性を検討するために、オープンラベル前後比較臨床試験のプロトコールを作成し、実施する。

３．研究の方法

本研究では、わが国での RFCBT の臨床場面の実施体制の整備を図ることを目的に RFCBT 実践治療者ハンドブック等のツールを開発し、また RFCBT の質を確保する観点からスーパービジョン法について検討する。次に、RFCBT のパイロットケースを行い、その feasibility を確認する。最後に、RFCBT の有効性の検討を目的に、オープンラベル前後比較臨床試験のプロトコールを作成し、被験者に RFCBT を実施する。

４．研究成果

わが国での RFCBT の臨床場面の実施体制の整備を図ることを目的に、本研究では RFCBT 治療者用ハンドブックを開発し、面接音声ファイルを用いた屋根瓦式スーパービジョン法を確立した。また、スーパービジョンで抽出された課題を RFCBT 治療者用ハンドブックに反映させ、改良を図った。そして、パイロットケース（5 例）として RFCBT を行い、その feasibility を確認した。さらに、うつ病に対する RFBCT の前後比較研究プロトコール(UMIN000037191)を作成し、実施した。

[RFCBT 治療者用ハンドブックの開発]
RFCBT 開発者であり研究協力者の Watkins 教授を招聘し、RFCBT の実施手順に加えて、技能ごとのロールプレイ動画作成、そして専門家が RFCBT を実施する際の留意点などトラブルシューティングをまとめた。介入のポイントとなる、機能分析、IF-THEN plan、WHY-HOW 行動実験、Absorption、Compassion の技法のロールプレイ動画を収録した。

[面接音声ファイルを用いたスーパービジョン法の確立]
スーパービジョン(SV)は録音データと別途作成した逐語録、セッションを振り返る橋渡しシートをもとに開発者の Watkins 教授への留学経験のある梅垣佑介博士により WEB 形式で実施され、さらに梅垣博士は Watkins 教授からメタ SV を受ける屋根瓦式指導体制をとった。SV は、患者の問題点の整理、治療の進め方の方向性の確認、修正に有用であった。例えば、SV の中では、セッションの中で代替思考への方略として Compassion のイメージ訓練を導入した際、日本語での分かりやすい説明がないことから困難が生じ、この点について解決を図った。また、この点について RFCBT 治療者ハンドブックがブラッシュアップされた。

[パイロットケースを通しての RFCBT の feasibility の確認]
パイロットケースとして RFCBT を 5 例行った。どのケース中断なく安全に実施された。どのケースも 7 つの基本ステップの治療プロセスを経て、RFCBT の feasibility を確認した。
7 つの基本ステップとは、step 1 (反すうの頻度、結果、反すうが生じやすい文脈等に関する評価)、step 2 (心理教育を実践し、反すうを治療対象として取り扱うことの患者との合意し)、step 3(特定の反すう体験に焦点をあてた機能分析)、step 4 (反すうの変動性に影響を与えている条件の評価)、step 5 (反すうの機能と変動性について共有)、step 6 (適応的な行動に置き換える計画の検討)、step 7 (先行事象を特定し、不適応的な反すうの低減もしくは適応的な反すうの増加を目的として、要因を取り除くまたは増やすための介入の実践)である。

[RFCBT の有効性の検討]
①RFBCT の前後比較研究プロトコール(UMIN000037191)を作成した。
A. 試験デザイン：単群オープンラベル前後比較試験
B. 主要評価項目：1. 介入終了時点(16wk)の GRID-Hamilton Depression Rating Scale（GRID-HAMD）の開始時からの得点減少、2.脱落率
C. 副次評価項目：1. 後観察時点(28Wk, 40Wk)の GRID-HAMD の開始時からの得点減少、2. 介入前時点（0Wk）、介入中間時点（8Wk）、介入終了時点（16Wk）、後観察時点（28Wk, 40Wk）における、うつ症状の自覚的重症度（BDI-II）、全般性不安症状の自覚的重症度(GAD-7)、反すうの程度（RRS）、機能障害の程度（SDISS）、回避行動の程度（CBAS）、ストレス対処行動の傾向（CISS）、3. 毎回の認知行動療法セッション開始前のうつ症状の自覚的重症度（QIDS-J）と生活の質（EQ-5D-5L）、毎回のセッション実施後のセッションの満足度（SRS）、4. 介入前時点（0Wk）、中間時点（8Wk）、介入終了時点（16Wk）における治療満足度（CSQ-8j）
D. 選択基準：1) Baseline 評価時に SCID で DSM-IV 大うつ病性障害 Major Depressive Disorder の診断を認めた者、2) Baseline 評価時点までに、8 週間以上の治療容量の抗うつ薬による治療、もしくは 8 週間以上の厚生労働省のうつ病の認知療法・認知行動療法マニュアルに準拠した認知行動療法による治療を受けた者、3) Baseline 評価時に HAMD-17 得点>＝14、4) 研究期間内 8 回

以上、来院できる見込みのある者、5) Baseline 評価時に 20 歳以上 70 歳未満、6) 本試験の目的、内容を理解し、本人からの自由意思による試験への参加の同意を文書で取れた者

E. 除外基準：1) アルコール等の物質使用障害の併存を baseline 評価時から 12 か月以内に認める者、2) Baseline 評価時に軽躁病エピソード、躁病エピソード、精神病性障害の既往・現症を認める者、3) 他の primary Axis I Disorders を baseline 評価時から 12 か月以内に認める者、4) 反社会性パーソナリティ障害を認める者、5) Baseline 評価時に切迫した希死念慮を臨床判断で認める者、6) Baseline 評価時または評価時から 1 年以内に重度の脳器質性病変もしくは認知機能障害を認める者、7) Baseline 評価時に主治医による臨床診断で生命に関わるような重篤な、あるいは不安定な状態の身体疾患を認める者、8) 介入期間中に他の構造化された精神療法（支持療法を除く）を受けている者、9) その他研究責任者が本研究の対象として不適当と判断した者

②評価完了した 1 例の結果の概要

アウトカム評価では、うつ病重症度の HAMD 得点は、介入前 20 点から介入後 4 点と寛解に至り、治療アドヒアランスは良好で、高い治療満足度を得た。プロセス評価では、社会的場面からの認知的回避ならびに回避行動が改善した。

■得られた成果の国内外における位置づけとインパクト

本研究は、海外で有効性が確立されている医療技術を日本に新規導入する際、将来の普及法をも見据えた研究の進め方を示した点で意義が大きい。また、わが国に当該医療技術を所有する指導者が十分にいない場合において WEB を用いた研修方法と、海外の専門家によるメタ・スーパービジョンを行うなど屋根瓦式指導体制を確立した点も新しい。このような段階を経た研究の実施により治療者の育成も図ることが出来き、今後に海外機関と共同して RFCBT を実践できうる体制を整備した点の意義は大きい。

■今後の展望

RFCBT の有効性に関しては、単群オープンラベル前後比較試験の後は、ランダム化比較試験と研究を進めていく。有効性の確認と、普及体制を確立することで、従来型認知行動療法に反応しないうつ病患者への新たな治療選択を提供に貢献することが期待される。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計19件（うち査読付論文　5件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　4件）

１．著者名 Katayama Nariko、Nakagawa Atsuo、Kurata Chika、Sasaki Yohei、Mitsuda Dai、Nakao Shigetsugu、Mizuno Sayuri、Ozawa Mire、Nakagawa Yuko、Ishikawa Natsumi、Umeda Satoshi、Terasawa Yuri、Tabuchi Hajime、Kikuchi Toshiaki、Abe Takayuki、Mimura Masaru	４．巻 10
２．論文標題 Neural and clinical changes of cognitive behavioural therapy versus talking control in patients with major depression: a study protocol for a randomised clinical trial	５．発行年 2020年
３．雑誌名 BMJ Open	６．最初と最後の頁 e029735～e029735
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1136/bmjopen-2019-029735	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Katayama N, Nakagawa A, Umeda S, Terasawa Y, Kurata C, Tabuchi H, Kikuchi T, Mimura M.	４．巻 23
２．論文標題 Frontopolar cortex activation associated with pessimistic future-thinking in adults with major depressive disorder.	５．発行年 2019年
３．雑誌名 Neuroimage Clin.	６．最初と最後の頁 101877
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1016/j.nicl.2019.101877.	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 中川敦夫	４．巻 13(1)
２．論文標題 海外のSupervisorからSuperviseを受けたケースについて考える　反芻焦点化認知行動療法(rumination-focused CBT)の教育訓練の取り組み	５．発行年 2020年
３．雑誌名 認知療法研究 = Japanese journal of cognitive therapy	６．最初と最後の頁 27-29
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 満田大，野上和香，中川敦夫	４．巻 272(5)
２．論文標題 【気分障害UPDATE-難治性うつ病に対しあきらめず取り組む】治療効果の検討　治療抵抗性うつ病に対する認知行動療法	５．発行年 2020年
３．雑誌名 医学のあゆみ	６．最初と最後の頁 461-465
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 加藤典子，中川敦夫	4．巻 12(2)
2．論文標題 反芻思考に取り組む : Rumination-Focused CBT (第18回日本認知療法・認知行動療法学会シンポジウム) -- (新世代認知行動療法から見える新しい展望 : ベックの認知療法に何を足すか)	5．発行年 2019年
3．雑誌名 認知療法研究 = Japanese journal of cognitive therapy	6．最初と最後の頁 69-71
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 中川敦夫	4．巻 2019特別号
2．論文標題 認知行動療法 過去、現在、未来、その先へ	5．発行年 2019年
3．雑誌名 精神神経学雑誌	6．最初と最後の頁 S330 - S330
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 中川敦夫	4．巻 2019特別号
2．論文標題 反芻思考とうつ病 反芻思考へのアプローチ 反芻焦点化認知行動療法	5．発行年 2019年
3．雑誌名 精神神経学雑誌	6．最初と最後の頁 S558 - S558
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 中尾重嗣，中川敦夫	4．巻 19(1)
2．論文標題 インターネットを用いた認知行動療法	5．発行年 2019年
3．雑誌名 分子精神医学	6．最初と最後の頁 34-38
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 中川敦夫	4．巻 19(1)
2．論文標題 特集－認知行動療法の進歩：研究と臨床の最前線　特集に寄せて－	5．発行年 2019年
3．雑誌名 分子精神医学	6．最初と最後の頁 1-1
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Nakao Shigetsugu、Nakagawa Atsuo、Oguchi Yoshiyo、Mitsuda Dai、Kato Noriko、Nakagawa Yuko、Tamura Noriko、Kudo Yuka、Abe Takayuki、Hiyama Mitsunori、Iwashita Satoru、Ono Yutaka、Mimura Masaru	4．巻 20
2．論文標題 Web-Based Cognitive Behavioral Therapy Blended With Face-to-Face Sessions for Major Depression: Randomized Controlled Trial	5．発行年 2018年
3．雑誌名 Journal of Medical Internet Research	6．最初と最後の頁 e10743～e10743
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.2196/10743	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 加藤典子，中川敦夫	4．巻 106(5)
2．論文標題 職場におけるうつ病・自殺の予防－特集 職場のメンタルヘルス 知っておくべき職場と産業保健スタッフの対応－	5．発行年 2018年
3．雑誌名 診断と治療	6．最初と最後の頁 565-569
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 中川敦夫	4．巻 6(1)
2．論文標題 うつ病に対する認知行動療法の上乗せ効果－ランダム化比較試験－	5．発行年 2018年
3．雑誌名 DEPRESSION JOURNAL	6．最初と最後の頁 28-29
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 大野裕，中川敦夫，菊地俊暁	4．巻 60(11)
2．論文標題 認知行動療法の立場から現代の精神医療を考える.－特集 精神科臨床から何を学び、何を継承し、精神医学を改革・改良できたか(Ⅰ)－	5．発行年 2018年
3．雑誌名 精神医学	6．最初と最後の頁 1271-1279
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Nakagawa Atsuo、Mitsuda Dai、Sado Mitsuhiro、Abe Takayuki、Fujisawa Daisuke、Kikuchi Toshiaki、Iwashita Satoru、Mimura Masaru、Ono Yutaka	4．巻 78
2．論文標題 Effectiveness of Supplementary Cognitive-Behavioral Therapy for Pharmacotherapy-Resistant Depression	5．発行年 2017年
3．雑誌名 The Journal of Clinical Psychiatry	6．最初と最後の頁 1126～1135
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.4088/JCP.15m10511	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 Kudo Yuka、Nakagawa Atsuo、Wake Taisei、Ishikawa Natsumi、Kurata Chika、Nakahara Mizuki、Nojima Teruo、Mimura Masaru	4．巻 Volume 13
2．論文標題 Temperament, personality, and treatment outcome in major depression: a 6-month preliminary prospective study	5．発行年 2017年
3．雑誌名 Neuropsychiatric Disease and Treatment	6．最初と最後の頁 17～24
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.2147/NDT.S123788	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 満田 大，加藤 典子，中川 敦夫	4．巻 59(5)
2．論文標題 認知行動療法の現在とこれから-医療現場への普及と質の確保に向けて うつ病の認知療法・認知行動療法の実際	5．発行年 2017年
3．雑誌名 精神医学	6．最初と最後の頁 419～425
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 中尾 重嗣，中川 敦夫	4．巻 4
2．論文標題 インターネットを用いたスーパービジョンの可能性	5．発行年 2017年
3．雑誌名 精神療法増刊	6．最初と最後の頁 30～34
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 中川敦夫	4．巻 10(2)
2．論文標題 認知行動療法の質を維持するために:CBTセラピストのQuality Controlを考える　厚生労働省研修事業の取り組み	5．発行年 2017年
3．雑誌名 認知療法研究	6．最初と最後の頁 100～103
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 満田 大，中川 敦夫	4．巻 75(10)
2．論文標題 うつ病に対する認知行動療法	5．発行年 2017年
3．雑誌名 日本臨床	6．最初と最後の頁 1542～1547
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計25件（うち招待講演　2件／うち国際学会　2件）

1．発表者名 Nakagawa A.
2．発表標題 Implementing cognitive behavior therapy in Japanese clinical practice: bridging the gap between research and practice.
3．学会等名 9th World Congress of Behavioural and Cognitive Therapies 2019（招待講演）（国際学会）
4．発表年 2019年

１．発表者名 中川敦夫
２．発表標題 （教育講演）認知行動療法－過去、現在、未来、その先へ－
３．学会等名 第115回日本精神神経学会学術総会
４．発表年 2019年

１．発表者名 中川敦夫
２．発表標題 反芻思考へのアプローチ：反芻焦点化認知行動療法
３．学会等名 第115回日本精神神経学会学術総会
４．発表年 2019年

１．発表者名 中川敦夫
２．発表標題 うつ病に対する認知行動療法：言葉による治療の効果
３．学会等名 第16回日本うつ病学会総会
４．発表年 2019年

１．発表者名 中川敦夫
２．発表標題 うつ病に対する認知行動療法の治療機序の解明へ：脳機能画像アプローチによる取り組み
３．学会等名 第16回日本うつ病学会総会
４．発表年 2019年

１．発表者名 中川敦夫
２．発表標題 うつ病に対する認知行動療法：遠隔技術を用いたセッションとスーパービジョン
３．学会等名 第19回日本認知療法・認知行動療法学会
４．発表年 2019年

１．発表者名 中川敦夫
２．発表標題 デジタル時代の認知行動療法：CBT実践法とスーパービジョン
３．学会等名 第19回日本認知療法・認知行動療法学会
４．発表年 2019年

１．発表者名 中川敦夫
２．発表標題 うつ病に対する認知行動療法：効果検証と普及
３．学会等名 第19回日本認知療法・認知行動療法学会
４．発表年 2019年

１．発表者名 木村あやの，中川敦夫
２．発表標題 認知行動療法後の社会機能の改善：E-CAM 研究2 次解析
３．学会等名 第19回日本認知療法・認知行動療法学会
４．発表年 2019年

１．発表者名 満田大，中川敦夫
２．発表標題 うつ病に対する認知行動療法における効果発現時期の予測因子の検討－治療中間時点におけるうつ評価尺度からの検討－
３．学会等名 第19回日本認知療法・認知行動療法学会
４．発表年 2019年

１．発表者名 倉田知佳，満田大，片山奈理子，中川敦夫
２．発表標題 うつ病に対する認知行動療法における否定的認知の改善が長期経過に与える影響
３．学会等名 第19回日本認知療法・認知行動療法学会
４．発表年 2019年

１．発表者名 加藤健徳，満田大，加藤典子，武智小百合，岩下覚，中川敦夫
２．発表標題 反芻焦点化認知行動療法（RF-CBT）が有効であった1 症例：回避に注目して
３．学会等名 第19回日本認知療法・認知行動療法学会
４．発表年 2019年

１．発表者名 中川敦夫
２．発表標題 臨床における診断や症状評価の新たなる可能性：より精緻な臨床評価を目指して「精神科診断・症状評価を再考する：研究と臨床をつなぐ」
３．学会等名 第114回日本精神神経学会学術総会
４．発表年 2018年

１．発表者名 中川敦夫
２．発表標題 人工知能時代のインターネット支援型認知行動療法の可能性「外来診療におけるインターネット支援型認知行動療法の活用と今後の展望」
３．学会等名 第114回日本精神神経学会学術総会
４．発表年 2018年

１．発表者名 中川敦夫
２．発表標題 多様化するうつ病治療－適応、利点、問題点、実現可能性－「うつ病に対する精神療法的アプローチ；その課題と展望」
３．学会等名 第15回日本うつ病学会総会
４．発表年 2018年

１．発表者名 中川敦夫
２．発表標題 多様なうつ病の治療最適化を目指して：うつ病に対する精神療法的アプローチ「うつ病に対する認知行動療法：エビデンスをつくり、普及へ」
３．学会等名 第15回日本うつ病学会総会
４．発表年 2018年

１．発表者名 中川敦夫
２．発表標題 Evidence based practiceを考える：うつ病治療における臨床実践とエビデンスのあいだ」
３．学会等名 第36回日本森田療法学会
４．発表年 2018年

１．発表者名 中川敦夫
２．発表標題 自殺未遂者への精神療法的アプローチ「うつ病とsuicidality」
３．学会等名 第42回日本自殺予防学会総会
４．発表年 2018年

１．発表者名 中川敦夫
２．発表標題 うつ病に対する認知行動療法：エビデンスを創り、臨床現場に届ける
３．学会等名 第18回日本認知療法・認知行動療法学会
４．発表年 2018年

１．発表者名 中川敦夫
２．発表標題 反芻焦点化認知行動療法（rumination-focused CBT）の教育研修の取り組み
３．学会等名 第18回日本認知療法・認知行動療法学会
４．発表年 2018年

１．発表者名 中川敦夫
２．発表標題 うつ病に対する認知行動療法；対面型CBTとインターネット支援型CBT
３．学会等名 第18回日本認知療法・認知行動療法学会
４．発表年 2018年

１．発表者名 中川敦夫
２．発表標題 ランダム比較試験のポイント:ECAM研究を振り返る
３．学会等名 第18回日本認知療法・認知行動療法学会
４．発表年 2018年

１．発表者名 Katayama N, Nakagawa A, Umeda S, Terasawa Y, Kikuchi T, Tabuchi H, Yamagata B, Mimura M
２．発表標題 Neural basis of future thinking in major depression: a fMRI study.
３．学会等名 The 23th Annual Meeting of the Organization for Human Brain Mapping（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 中川敦夫
２．発表標題 うつ病に対する認知行動療法の上乗せ効果:ランダム化比較試験
３．学会等名 第14回日本うつ病学会総会/第17回日本認知療法・認知行動療法学会（招待講演）
４．発表年 2017年

１．発表者名 中川敦夫
２．発表標題 認知行動療法：サイエンスとアートの新たな融合
３．学会等名 第14回日本うつ病学会総会/第17回日本認知療法・認知行動療法学会
４．発表年 2017年

〔図書〕　計3件

1．著者名 三村將，幸田るみ子，成本迅，中川敦夫　他	4．発行年 2019年
2．出版社 医歯薬出版株式会社	5．総ページ数 233
3．書名 公認心理師カリキュラム準拠　精神疾患とその治療	

1．著者名 三村將（編），　前田貴記，内田裕之，藤澤大介，中川敦夫（編著）	4．発行年 2017年
2．出版社 医学書院	5．総ページ数 306
3．書名 精神科レジデントマニュアル	

1．著者名 丸山総一郎（編），　中川敦夫（分担執筆）	4．発行年 2017年
2．出版社 南山堂	5．総ページ数 404
3．書名 「はたらく」を支える！女性のメンタルヘルス	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

6．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	大野　裕 (Ono Yutaka)		

６．研究組織（つづき）

	氏名 （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	ワトキンス　エドワード (Watkins Edward)		
研究協力者	阿部　貴行 (Abe Takayuki)		
研究協力者	菊地　佳代子 (Kikuchi Kayoko)		
研究協力者	満田　大 (Mitsuda Dai)		
研究協力者	加藤　典子 (Kato Noriko)		
研究協力者	梅垣　佑介 (Umegaki Yusuke)		
研究協力者	倉田　知佳 (Kurata Chika)		
研究協力者	武智　小百合 (Takechi Sayuri)		

６．研究組織（つづき）

	氏名 （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	中川　ゆう子 (Nakagawa Yuko)		
研究協力者	工藤　由佳 (Kudo Yuka)		
研究協力者	片山　奈理子 (Katayama Nariko)		
研究協力者	中尾　重嗣 (Nakao Shigetsugu)		
研究協力者	小林　由季 (Kobayashi Yuki)		
研究協力者	石川　菜津美 (Ishikawa Natsumi)		
研究協力者	馮　えりか (Hyou Erika)		
研究協力者	小田桐　沙耶歌 (Odagiri Sayaka)		